

覚悟を決めた時、場面は好転する

「人生本来、戯れと知りながら、この一場のたわむれをたわむれとせずして、真面目につとむべし」 福沢諭吉が、平生の心構えとして説いた言葉だそうです。

宇宙の広さに比べたら、地球そのものが、砂漠の砂の一粒のようなものです。

悠久の歴史の中で、百年に足りない我々の人生は、ほんの一瞬のきらめきです。

我々の人生の中で遭遇する、あらゆる困苦・艱難・疾風怒濤も、他の人から見れば、痛くも痒くもない出来事に過ぎません。

仏教では、諸行無常と万物は常に変転し、不変のものは何一つないと説いています。見方によれば、これぞ“たわむれ”以外の何物でもありません。

福沢諭吉は、達観しながら、今を、ここを、自分を懸命に生きろ！と教えてくれています。

「武漢コロナ」の大事件も、天が与えた試練、自己成長の機会と捉えて、真正面から取り組んで参りましょう。

碩学安岡正篤師は、「講習講演は知識の漫談であり、学問は概念の漫談である。かかる雑識は己の人格と何等関係がない。人生に於いて重要なことは、体験の根を深く下ろすことでなければならぬ」と述べています。

安岡師自身が、人の道を誰よりも深く広く説きながら、こう言わせるものは何でしょうか？ 聴く側の力不足でしょうか？ 実行に移す人間の余りに少ないことからの嘆息でしょうか？

社長の日常の言動を考えれば、理解できるのではないのでしょうか。

解ってもらおうと、一所懸命に、経営理念を説きます。しかし、何か一枚、社員との間に見えない壁があるような、伝わり切らない、もどかしさに苦悶します。

組織の中にいながら、孤立した自分を発見し、愕然とすることがあります。

トップは孤独だと謂われる所以です。

そんな時、“俺一人きりになっても、この会社を良くするぞ” “経営理念と心中するつもりで、やり切るぞ”と覚悟をした瞬間に、後ろから全員がついて来てくれるという場面を経験します。

これが、「たわむれをたわむれとせずして、真面目につとめたとき」ではないのでしょうか。これが、「体験の根を深くしたとき」ではないのでしょうか。

ついつい、武漢コロナが悪い、世の中が悪い、社員が解ってくれないと言いがちです。“大變”とは、大きく変わるときです。大きく変わるのは、外でもない「社長」あなた自身です。よし、やるぞ！と、奮い立ちましょう。

私ども、中央総研の社員に、ご相談ください。全力で、ご支援させて戴きます。



今月のポイント

山よりでっかい、獅子は出ん！！